

1 初期分けつを確保するために

5月10日までに**稚苗**を**田植**する

- (1) 稚苗（2.0～2.5葉）を植える
→ 2.5葉以降の老化苗を避ける

- (2) 5月連休中の田植により8月10日までに出穂させる
→ 出穂以降、登熟に必要な気温、日照を十分に得るため

育苗日数の目安

播種	田植	育苗日数
4月5日	5月1日	26日
4月10日	5月5日	25日
4月15日	5月10日	25日

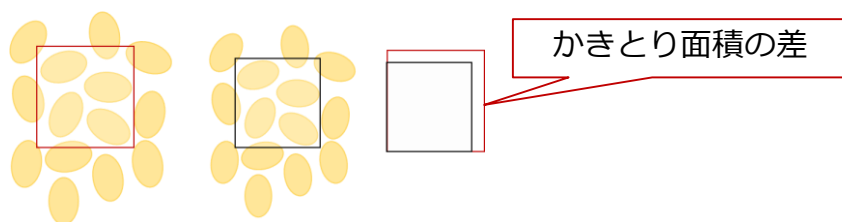


- (3) 栽植密度 : **70株／坪**を基準とする
→ 50株／3.3㎡では穂数が不足します

- (4) 植付本数 : 3～4本／株とする
→ <かきとり量の調節>

ひやくまん穀はコシヒカリより籾が大きいため、
コシヒカリと同じかきとり量の設定では、植付本数が不足する
ため調節が必要がある。

かきとり量の比較（イメージ）



ひやくまん穀 コシヒカリ

- (5) 植付深さ : 1葉が見える程度の**浅植え**とする
(施肥量は裏面です！！)

(6) 施肥：地域の適正施肥量を確認する

施肥量：28～35kg/10a

(窒素成分：慣行コシ + 3～4 kg/10a)

※ 前年度にひやくまん穀が倒伏した圃場では、
10a当たりの施肥窒素量を1～2kg減らすこと

2 田植後の水管理：

浅水管理で3葉（5葉期）から分けつを発生させる

(1) 活着後は速やかに浅水管理

(2) 活着に要する日数：1～3日程度

① 田植え2～4日後から **浅水管理**

② 浅水管理の水深：**3cm程度**

8.5葉期（6月中旬）までに穂になる茎を確保するのはなぜか？

→ 8.5葉期以降に発生した分けつは穂になりません

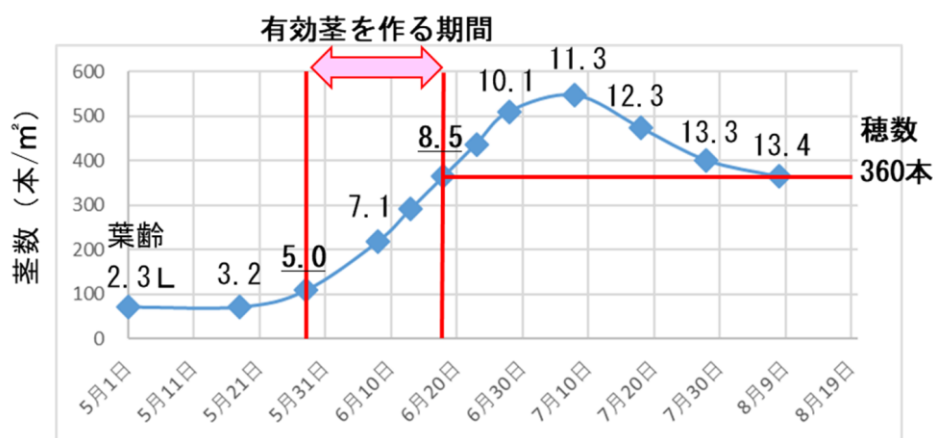


図 60株/3.3㎡の葉齢展開と茎数の推移（イメージ）

※ 70株/坪植えであっても傾向は同じく、6月下旬以降の分けつは穂になりません
6月中旬までに有効茎を確保できるよう浅水管理に努めましょう